地質ニュース467号，59-62頁，1993年7月
Chishitsu News no. 467, p. 59-62, July, 1993

トルコ人の帰属意識

山口洋一[1)]

トルコはヨーロッパとアジアと中東アラブ世界の狭間に位置している．日本の2.1倍に及ぶ国土の内，ボスポラス海峡を挟んで，西のヨーロッパ側の国土は全体の3%で，残り97%はアジア側に所在している．

オスマン帝国の最盛期(16世紀)の版図は，西にはバルカン半島から欧州南東部に食い込み，南の方は東地中海からアラビヤ半島，北アフリカのアラブ世界に及んでいたが，小アジアのアナトリアの部分は現在の国土とあまり違わない．従って，大雑把に言って，現在のトルコ共和国はオスマン帝国領からヨーロッパ部分のほとんど全てとアラブ世界の部分を取り除いた領域を占めていると言うことができる．

中央アジアの騎馬民族に端を発したトルコ人には，こうした歴史の過程で色々な血が混ざり，現在のトルコ人の風貌は金髪碧眼の白人タイプから茶褐色の肌色に黒髪のアジア型まで多種多様である．

この様な歴史を経てきたトルコの人達は自分たちのアイデンティティーについて如何なるとらえ方をし，どの様な帰属意識，仲間意識を持ち，何処との連帯感を有しているのであろうか．彼らの関心はどちらの方向に向いているのであろうか．多くのトルコの人達にこの点について尋ね，又私自身の観察を通じて得られた結論は，ヨーロッパとアジアへの帰属意識が半々で，アラブ世界との仲間意識は全くと言っていいほど欠如していると言うことである．

(1) オスマン帝国時代のアイデンティティー

オスマン帝国の時代，その広大な版図は種々雑多な種族で構成され，現在のトルコ領に相当する部分に限っても，トルコ人のほかにギリシャ人，ユダヤ人，アルメニヤ人，チェルケス人，グルジア人，アッシリア人等が混在していた．しかも言語はギリシャ語，トルコ語，アラビア語，ペルシャ語の四言語が主として用いられたが，トルコ語は農民階級の言葉としてむしろ蔑まれ，オスマン宮廷では，アラビア語とペルシャ語とトルコ語を混用したオスマンル語(osmanlica)と称される独特の言葉が常用され，またアラビア語はコーランの言葉として尊ばれた他，トルコ語の表記にもアラビア文字が使用されたのである．今世紀初めに出されたオスマン帝国の辞書を見ると，そこに収録されている約三万語の言葉の内，四割がトルコ語で，残りの六割はアラビア語とペルシャ語が占めているのである．

従って，当時のこの国の人達はトルコ人としてのアイデンティティーは全く意識の中になく，支配階級に属する人達が僅かにオスマン帝国の臣民と言う意識を持っていたに止まっていたようである．現に，アナトリアは領土の内の一つであるに過ぎなかった．十四世紀後半から十五世紀にかけて，オスマ

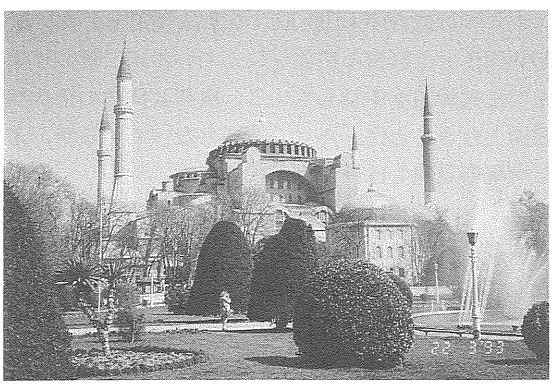

写真1　キリスト教からイスラム教への歴史の移りを象徴するアヤ・ソフィアモスク．6世紀にビザンチン帝国の象徴として建設されたが，16世紀にオスマントルコがイスタンブルに首都を移すとともに改造され今日のモスクの姿となった．(藤井紀之撮影)

1) 駐トルコ日本大使

キーワード：オスマン帝国，中央アジア，アラブ世界，トルコ共和国

ン帝国が拡大して行く過程を見ると，むしろバルカン征服の方が先行しているのであり，当時の国家財政の収入も三分の二がバルカンから，三分の一がアナトリアからもたらされていた．

他方，被支配階級である一般の人民は，自分たちはオスマンのサルタンの支配下にある「アナトリアの住民」，「ブルガリアの住民」，「アルバニアの住民」或いは「ギリシャの住民」と言った漠然とした意識しか持っていなかったのであろう．

しかし，興味深いことに，諸外国はこの帝国をトルコ帝国と受け止めていたことである．1830年代にフランスに赴任した大使は，トルコの大使として紹介されると，「私はトルコの大使ではなくオスマン帝国の大使です」と断っていたそうである．

(2) トルコ共和国成立後のアイデンティティー

オスマン帝国時代に意識されたアイデンティティーが以上のとうりであるとすれば，このアイデンティティーはオスマン帝国の崩壊と同時に消滅してしまうこととなり，新たに誕生した共和国においては，新たなアイデンティティーの確立が急務となった．かくて，ケマル・アタチュルクはトルコ語に立脚したトルコ人としてのアイデンティティーの確立に力を注ぐこととなる．

—ヨーロッパの仲間

トルコは欧州共同体(EC)の準加盟国として，欧州共同体とは緊密な関係を結んでいるが，更にすすんで正式加盟を申請している．欧州共同体の正式加盟国となることはトルコの悲願となっているが，未だ実現の見通しは皆目立っていない．

デミレル首相はじめ政府の要路にある人達は，事有るごとに「トルコはヨーロッパの国である」と強調している．北大西洋条約機構(NATO)の加盟国として，欧州南翼の防衛責任を担い，一貫して西側諸国との協力姿勢を持してきたトルコ政府としては，何時までたってもEC加盟が実現しないのは歯がゆい思いであるに違いない．殊に，お隣のギリシャがとっくに入って，トルコが入れてもらえないのはなんとも苛立たしく感じることであろう．

1992年1月にトルコに来訪したECのベンゲマン副委員長は「正式加盟のための条件は(1)民主主義の確立と人権の尊重が十分になされていること及び(2)EC内での自由競争に堪えうるだけの経済発展段階に達していることの二点のみである」と述べ，これ以外の要素が障害になることはない旨を強調した．これがEC側の公式見解なのであろう．同じ年の四月にトルコを訪れたフランスのミッテラン大統領は「ソ連邦崩壊後，ECはソ連・東欧から難民の波が押し寄せて来ることを一番心配している．現時点でトルコがECに加盟すれば，トルコ人労働者がEC内にどっと溢れ出てEC内部のバランスを崩すこととなりかねない．トルコの国民所得がもっと高くなるところまで経済を発展させ，家族計画を実施して人口増加を抑制することにより，この様な失業者の輸出の心配をなくさなければ，現状でのトルコのEC加盟は難しい」と述べている．ここでも「回教国だから除け者にするという訳ではありませんよ」ということを暗に匂わせている．

トルコの人達も自国の経済発展段階の水準から見て，今直ぐ入れてもらえないのは分からなくはない．それどころか，もし「はい，明日からはいりなさい」と言われて，いきなり全ての障壁が取っ払われてEC内の自由競争にさらされることとなったら，トルコの経済はとても太刀打ちできないことも知っている．それでも彼らはECに入れないことによって「ヨーロッパから仲間外れにされている」という感じを強く受けているのである．トルコの外務省の高官ですら，私と二人だけで話すと「ECがトルコの加盟を歓迎しない真の理由はトルコが回教徒の国だからであり，それ以外の理屈づけは言い訳に過ぎない．何時まで経っても入れっこないよ」と洩らしている．

中央アジアの騎馬民族を源流とするトルコ族は西へ西へと勢力を拡張し，オスマン帝国の最盛期，スレイマン大帝(1520–66)の黄金期には，ベルグラードからハンガリー，トランシルバニアの大半を帝国の領内におさめ，ウィーンにまで攻撃をしかけているのである．だだ，このウィーン攻撃だけは成功を見るにいたらず，ヨーロッパへの進撃はここで止まった(1529)．このように，歴史的にもトルコは西の方向に熱い視線を向けてきた訳であり，今日のトルコの人達が抱く「トルコはヨーロッパの一員」でありたいとの願望もこうした歴史と何処かで関係しているのかもしれない．尤もオスマン帝国時代の西に向けた熱い視線は専ら征服欲に発するものであ

写真2　トルコ・イラン・アゼルバイジャン(旧ソ連)3国の国境に聳える標高5165 mの最高峰アウル山(アララット山)．山の彼方はコーカサス，中央アジアのトルコ民族が住む国々と続いている．(藤井紀之撮影)

り，ヨーロッパ諸国との連帯感とか仲間意識とは無縁であったことは注意を要する．

このようなヨーロッパ指向，ヨーロッパの一員たることへの願望はインテリ層において特に強い．又この傾向がトルコ東部よりも西部の人達の間で顕著なのは，西部地域が占めるヨーロッパとの地理的近接性を考えれば頷ける．

—アジアとの連帯感

トルコの人達はヨーロッパの帰属意識と同時に，アジアへの帰属意識も強く持っている．これは自分たちの遠い祖先は中央アジアの騎馬民族に端を発しているという意識と，現に風俗，習慣，文化，伝統にアジア的要素が色濃く見られることからもたらされているものと思われる．

アジアとの仲間意識が具体的な形をとって如実に表明された最近の出来事は，旧ソ連邦の崩壊に伴って誕生した中央アジア・コーカサスの回教系共和国に対する支援である．アゼルバイジャン，カザフスタン，ウズベキスタン，キルギススタン，トルクメニスタン，タジキスタンの回教系六共和国がそれぞれ独自の道を歩み始めるや，トルコはいち早くこれら共和国との外交関係を設定し，様々な分野で積極的に支援を行い，交流を深めている．民間企業レベルでも，これら諸国との間で色々な協力事業が進められている．新聞やテレビの報道でも連日これら共和国についてのニュースが伝えられ，国民の大きな関心を呼んでいる．

これら六共和国のうち，唯一タジキスタンのみはペルシャ系であるが，それ以外の五カ国はトルコ系の国である．即ち，人種的にトルコと同族であり，文化的に共通性が高く，何よりも言葉が同じトルコ語の国なのである．従って，中央アジア・コーカサスの回教系共和国に寄せるトルコ人の関心は，同じトルコ族に向けられた同胞意識によるのであって，アジアとの仲間意識のあらわれとは必ずしも言えないとの解釈も成り立つ．しかし，東南アジア，アセアン諸国，中国，日本等，広くアジアに関心が寄せられ，新聞やテレビでもこうしたアジアの国々についての報道や番組が多く，中でも日本への関心は抜群に高いことを考え合わせると，やはりトルコの人達のアジアへの帰属意識が背景として存在していることは否定できない．

—アラブ世界とは距離を置いて

トルコの人達は一方においてヨーロッパと，他方においてアジアとの連帯感，仲間意識があるのに反し，同じイスラム圏ですぐ南側に隣接して広がるアラブ世界に対してはこれが全く欠如している．近接した国同志でありながら親近感は薄く，交流もすくない．これは近隣のシリアやイラクとの間で，国家関係における難しい懸案問題を抱えていることも災いしているが，それ以前の問題として，トルコ人は概してアラブの人達に好感を持っていない．

イスラムの世界ではイスラムの共同体たる「ウンマ」への帰属意識が強く，イスラム世界全体としての一体感がもたれると言われているが，どうもこの点については，セキュラリズム(政教分離)に徹したトルコは例外の様である．

アンカラの外交団は約六十カ国の大使館より成り，かなりの規模であるが，外交団仲間同士の社交行事は大変活発で，晩餐会や各種パーテイーでの付き合いはなかなか盛んである．しかしこうした付き合いの折り，アラブ各国大使で顔を見かけるのはエジプトとモロッコ位で，それ以外のアラブ大使にはまずお目に掛からない．外交団の社交の席には当然トルコ外務省員やトルコの社交界の人達も加わるので，トルコ人のアラブ嫌いから，自然とアラブの外交官は敬遠されることになるのであろう．各国大使館がそれぞれ年に一度催すナショナルデー・レセプションのように，全大使が招待される席でも，アラブの人達だけで固まってアラビヤ語で談笑し，他の

出席者と余り交わらないのが目につく．

トルコ人のインテリで政府の要職にあるＳさんに，アラブ観を伺ったところ，ごたぶんに漏れず，アラブ人は嫌いだと言う返事が返ってきたので，その理由を尋ねてみた．Ｓさん曰く「トルコ人とアラブ人は性格が余りにも違いすぎる．むしろ彼らは自分たちとは反対の性格だ．トルコ人が勤勉なのに対しかれらは怠惰，自分たちが正直なのに対し彼らは嘘つき，自分たちは規律正しく時間を守るの対し，彼らはルーズで時間を守らない，トルコ人の清潔好きにたいして彼らは不潔，それに何よりもトルコ人は信義を重んずるのに対し，彼らは人を裏切る．この最後の点が何といってもトルコ人のアラブ嫌いを決定的にしており，オスマン朝はアラブを植民地として治めたのではなく，イスラムの信奉者たる同胞として慈愛をもって受入れ，全く同等の帝国の一部として取り扱ってきたにもかかわらず，西欧帝国主義勢力が浸透しはじめるや，アラブ人達はこれと結んでトルコ人に銃を向け，多くのトルコ人を殺したのである．」

Ｓさんの言は勿論えらく単純化した表現が用いられており，額面通りに受け取る訳にはいかないであろう．この性格の対比ではいいことばかりがトルコ人で，アラブ人については悪いことばかりが並べたてられている．しかしＳさんの指摘は一般のトルコの人達が抱いているアラブ観をかなり的確に反映していることは疑いないのである．

トルコの新聞やテレビでもすぐお隣りの国でありながら，アラブ世界のことはあまりニュースの種にならないし，番組が組まれることもない．日本のこととなると，社会面の些細なニュースから大相撲の様子までよく新聞にでるのと比べると大変な違いである．やはりトルコ人一般の関心がアラブの方にはさっぱり向いていないのである．

YAMAGUCHI Yōichi (1993): Sense of Belongings of Turkish People.

トルコ語とローマ字

トルコ語は1928年，アラビア文字から英・独・仏語を基本としたローマ字表記に改められた．言葉自体は日本語同様，ほぼ子音と母音のセットの続きからなる．そのためローマ字になれた人はトルコ語のほとんどを音読できる．表記上の親近性から，英字新聞・世界地図・名刺・文献引用などでトルコ語の固有名詞(人名，地名など)をそのまま英語文字で表現する例が多い．

トルコ語アルファベットは29文字で，それぞれに大文字と小文字とがある．以下にトルコ語つづりを音声化する場合，実際の音により近づけるための注意(ヘボン式ローマ字との相違点)を記す．

1. 独語表記からの借用．独語風に発音する．
   ü (ウの口形で「イ」と発音)
   ö (オの口形で「エ」と発音)
2. 仏語表記からの借用
   ç (ch の働きをもつ．例：çay「チャイ」なお仏語では s の働き)
3. トルコ語独自の表記
   c (ローマ字の j の働きをもち，濁音となる．例：cami「ジャーミ」)
   ğ (軟らかの発音といわれ，その直前の音を心もち伸ばす働き)
   ı (i の頭の点が落ちたもので，i「イ」とは別音．背中をたたかれた時に発する「ウッ」の音．例：Topkapı「トプカプ」．英語表記になると Topkapi となり，トルコ語発音との違いが生ずる)
   ş (sh の働きをもつ．例：şişe「シシェ」)
   v (発音に濁りがなく w の音に近い．例：Van「ワン」．ちなみにトルコ語アルファベットには w がない)

なお，トルコ語は“母音調和”が厳密で，たとえばア列を含む単語や句ではその次の母音つづりがア列かウ列となる場合が多い．　(平野英雄)